様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　４ 月 １２ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０３１２３

研究課題名（和文）1910～20年代中国の多様性と可能性：同時代の日本・世界との思想連鎖の視点から

研究課題名（英文）Diversity and possibility of 1910-20 China: from the perspective of the intellectual interaction with contemporary Japan and the world

研究代表者
小野寺　史郎（ONODERA, Shiro）

埼玉大学・人文社会科学研究科・准教授

研究者番号：４０５１１６８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究を通じて、1910～20年代の中国思想史に関する国内外の最新の成果を吸収し、また日本史・朝鮮史や西洋史研究者の協力を得て定期的に研究会を開催し、同時代の日本や世界における思想史の潮流を把握することを試みた。最終年度には一般社団法人中国研究所との共催で五四運動百年記念シンポジウムを開催した。以上の研究活動を通じて、1910～20年代中国と同時代の日本や朝鮮、西洋における知識人の活動に確かな共通性や影響関係があったこと、その一方でそれぞれの文脈の違いにより大きく乖離した面もあったことを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、かつて混乱の時代と見なされてきた1910年代から1920年代にかけての中国を「多様性と可能性の時代」と捉えなおし、またこの時代の中国思想界と同時代の日本や世界の関係に着目することで新しい中国近代史像を示すことを目的としてきた。「研究成果の概要」で述べた活動を通じて、近代中国社会に新しい視点から光を当て、その新たなイメージを示すという目的をある程度まで達することができたと考える。具体的には、「五四新文化運動」という歴史観への再検討、「新文化運動」以外のこの時期の思想的多様性についての指摘を、具体的な事例に即して行い、その成果を論文や学会発表の形で世に問うた。

研究成果の概要（英文）：Thorough this research project, we acquired much knowledge about the latest academic results on Chinese intellectual history from 1910s to 1920s. And we held periodic meetings in cooperation with scholars on Japanese history, Korean history and Western history. In this way, we tried to understand the intellectual trends of Japan and the world at that time. As the final year project, we held the May Fourth movement 100th anniversary symposium in cooperation with the Institute of Chinese Affairs. Through these researches, we revealed that from 1910s to 1920s, Chinese and Japanese, Korean and European intellectuals certainly had common interests and mutual interactions, while there were also significant differences.

研究分野：中国近現代史

キーワード：中国近代史　思想史　1910年代　1920年代　思想連鎖

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)中国における 1910 年代から 1920 年代にかけては、袁世凱から張作霖にいたる軍人政治家や地方軍事指導者が武力で政権を争う、政治的に見れば非常に不安定な時代だった。しかし一方で、辛亥革命（1911 年）を経て曲がりなりにも代議制民主主義を基礎とする共和制が樹立されたこと、加えて皮肉なことに政権が不安定であったがゆえに社会に対する管理が十分に及ばなかったこと、上海などに中国政府の権力の及ばない外国人居留地（租界）が存在したことで、この時代には中国史全体を見渡しても類のない「自由」な言論空間が現出することになった。こうした時代背景の下で、知識人たちは中国の未来をめぐって活発な言論活動を展開した。

過去の研究においては、この時代は「五四新文化運動期」と呼ばれ、陳独秀や胡適など雑誌『新青年』に集った知識人たちの活動が専ら関心の中心となってきた。これは多分に、この新文化運動グループが後の中国共産党成立（1921 年）の母体となったという事情によるところが大きい。しかし、西洋文明の全面的な導入、儒教批判、男女の平等、言文一致の新文学などを掲げた新文化運動は、確かに当時において大きな影響力をもったものの、それがこの時期の中国における思想的活動の全てであったわけではない。そのため現在では、より政府に近い立場の知識人からなされた憲政や政治制度の改良をめぐる議論、新文化運動とは逆に、中国の古典を学術的な視点から再評価する試みなどに着目した研究が盛んに発表されている。新文化運動や五四運動（1919 年）にしても、そうした同時代のより多様な思想状況の中に位置づけて捉えなおす必要がある。

中国においても、2019 年の五四運動 100 周年には大規模な学会が予定されており、それに向けてこの時代についての研究はますます注目を高めていくことが予想された。このように近現代中国思想史の一つの鍵となる重要な時代について、新たな研究の切り口を提示するのが本研究課題の目的であった。

(2)この時代の中国思想史を研究するに際して、上記の「多様性」と並んで今後大きな論点となると考えられるのが、この時期の中国思想界と、同時代の世界、中でも日本との関係である。

日清戦争（1894～1895 年）での敗北後、中国では明治日本が近代化の一つのモデルと見なされ、数多くの知識人や学生が日本に留学し、日本を通じて西洋の学問や知識を吸収した。このことは近代中国思想史研究においても早くから重視され、特に西洋概念の翻訳に際して作られた和製漢語がそのまま中国語に取り入れられたことなどが指摘されている。

ただ、この事情は辛亥革命後においても同様であった。清の滅亡と中華民国の成立後も、日本には引き続き大量の中国知識人が留学・滞在していた。確かに、胡適に代表される欧米留学帰りの知識人たちの影響力も次第に大きくなりつつあったものの、1910～1920 年代の中国知識人たちの多様な思想的活動の最大の資源となったのはやはり日本であった。このことは現在の中国や英語圏の研究においても決して軽視されているわけではないものの、実際にこの時期の日本の学問や文化が中国思想界にいかなる影響を及ぼしたのか、その具体的なあり方などについては、清末の研究に比べて立ち遅れているという状況があった。

２．研究の目的

以上のような背景を踏まえ、本研究は以下のことを明らかにすることを目的とした。

(1)1910～1920 年代の中国思想界を「多様性」と「可能性」の視点から再構築する。

前述のように、この時期の中国においては相対的な言論の「自由」の下で、多様な主体が中国の行方をめぐる議論を展開した。そこには、政治家やそのブレーン、外交などに携わるテクノクラート、アカデミーと在野の知識人、ジャーナリスト、在地読書人、学生や留学生などが含まれる。また、1930 年代以降に、中国国民党の三民主義や、中国共産党の社会主義に選択肢が収斂されていく、それ以前の時期には、他にも様々な可能性が真剣に検討されていた。そしてそれらには、非現実的と思われるものから、今日の中国においても十分に検討の価値があるものまで、非常に幅広い内容が含まれていた。こうした思想界のあり方自体をこの時代の特徴と見なして、中国近現代思想史の全体像を描きなおす。

(2)1910～1920 年代の中国思想界を世界・日本との関係という視点から再構築する。

1910～1920 年代は、世界的に見れば第一次世界大戦の勃発と 19 世紀的な古典的自由主義の終焉、西洋の没落と戦後の新たな国際秩序の模索、米ソの台頭に代表される大きな変動の時代である。こうした世界の動きが東アジアにも大きな影響を及ぼしていたことは近年注目を集めている。一方、過去の中国思想史においては、二十一か条要求（1915 年）とそれに起因する五四運動が新文化運動と結びつけられて重視されてきた一方で、それ以外の面で第一次世界大戦や日本が中国思想界に及ぼした影響については等閑視されてきた。そのためこの時期の中国思想界の動きは、専ら国内的な要因から説明されがちだった。しかし例えばなぜ西洋の没落が叫ばれたのとまったく同じ時期に、全面西洋化を主張する新文化運動が開始されたのか、といった問題一つとっても、いまだ十分に説得力のある回答は存在しない。それに答えるには、この時代の中国思想界の動きを、世界や日本との関係から描きなおすことが必要不可欠である。

過去の中国近代史研究において専ら否定的に見られてきたこの時代について見なおしが主張

されて久しい。しかし、政治史、地方史、外交史など個別の分野に関する研究の深化の一方で、それが必ずしもこの時代全体の見なおしにつながっていないのではないかという疑問がある。本研究の最終的な目的は、この時代の中国思想史の見なおしを通じて、この時代の中国像自体に新しい可能性を提示することにあった。

３．研究の方法

(1)研究代表者と研究分担者がそれぞれ専門とする分野を生かし、当時の中国思想界に様々な方向から光を当てることで、その「多様性」を浮かび上がらせる。具体的には、過去の研究で触れられることの少なかった、この時代の学術活動の全体像、同時代の政治や国際関係との関わり、中央と地方における思想的活動の意味などを明らかにする。異なるテーマをもつ担当者が集まる研究会という手法が必要となるのはそのためである。

(2)中国思想界と同時代の世界や日本の関係を明らかにするため、国内の研究機関に在籍する日本史や西洋史の研究者を研究会に招聘し、それらの分野の最新の成果を吸収する。具体的には、当時の中国に影響を与えた、大正デモクラシーやマルクス主義、第一次世界大戦前後の国際関係などについての専門家を想定している。

(3)中国思想界に影響を与えた同時代の世界や日本の学術活動や書籍を明らかにするため、国内外の研究機関や図書館において史料・文献調査を行う。

４．研究成果

(1)上記の目的を達成するため、研究代表者・分担者が国内外の研究機関や図書館において史料・文献調査を行った。

(2)同じく、定期的に研究会を開催し、調査の結果について情報を共有するとともに、国内の研究機関に在籍する日本史や西洋史の研究者を研究会に招聘し、それらの分野の最新の研究成果の吸収を図った。

第 1 回研究会（2017 年 7 月 30 日）：日本近代思想史を専門とする福家崇洋氏（富山大学・当時）を招聘し、「20 世紀初期日本の思想状況」の題名でご報告をいただいた。1900 年代から 1920 年代の日本における思想や運動の潮流の移り変わりについて、専門的な視点からの説明をいただいた。

第 2 回研究会（2018 年 2 月 22 日）：朝鮮近代史を専門とする小野容照氏（九州大学）を訪問し、研究会を開催した。小野氏から「1910～20 年代の朝鮮知識人の思想」の題で、この時期の朝鮮の思想潮流およびその中国との関係について総合的な説明をいただいた。また、研究分担者の竹元規人が「最近の中国での新文化運動期研究について」の題で、現在の中国でこの時期のどのような問題が中心的なテーマとして論じられているのかを報告した。

第 3 回研究会（2018 年 5 月 19 日）：研究分担者の森川裕貫が「第一次世界大戦後の中国における国際協調論とその射程」の題で、大戦後の中国知識人たちがどのような枠組みで国際関係を観察していたのかを具体的な事例に即して論じた。また同じく研究分担者の吉澤誠一郎が「学術史のなかの白鳥庫吉」の題で、白鳥を題材に、戦前の日本の中国認識を論じた。

第 4 回研究会（2018 年 9 月 30 日）：西洋思想史を専門とする馬原潤二氏（三重大学）を招聘し、エルンスト・カッシーラーと新カント学派を軸に、19 世紀から 20 世紀初頭にかけてのドイツを中心とするヨーロッパ哲学の潮流について説明をいただいた。

第 5 回研究会（2019 年 7 月 14 日）：日本近代思想史を専門とする武藤秀太郎氏（新潟大学）を招聘し、近刊の『「抗日」中国の起源――五四運動と日本』（筑摩書房、2019 年）について研究代表者の小野寺が書評報告を行った後、同時代の中国と大正デモクラシーの関係について説明をいただいた。

(3)本科研プロジェクトの成果発表の場として、五四運動百年記念シンポジウム（2019 年 11 月 24 日）を一般社団法人中国研究所と共催した。本科研からは、研究分担者の森川裕貫が「「五四新文化運動」再考」の題で報告し、従来当然視されてきた五四運動と新文化運動の関係について疑問を提起した。また竹元規人が「「新文化運動」と「文化主義」――日中間の思想の同時代性と差異」の題で報告し、「文明」や「文化」という概念の含意の再検討を通じて、この時期の日中思想界のつながりと差異を分析した。他にも多数の外部の研究者に報告を依頼し、研究代表者

の小野寺と吉澤誠一郎はコメンテーターを担当した。数多くの参加者を交え、活発な議論が交わされた。

(4)研究成果を論文や学会発表の形で公開した。代表的なものをいくつか選んで紹介する。

小野寺史郎「第一次世界大戦期の中国知識人と「愛国」の群衆心理――陳独秀を中心に」(『メトロポリタン史学』第 14 号、2018 年）は、第一次世界大戦が戦中・戦後の中国知識人たちに与えた影響を、彼らが社会と軍事の関係、知識人と民衆の関係をどのような思考枠組で捉えていたのかという視点から明らかにした。

吉澤誠一郎「五四運動とその残影」(『歴史地理教育』第 891 号、2019 年）は、五四運動がその後の時代にどのように解釈され、意味づけられてきたのかを概観し、その問い直しを提起した。

竹元規人「従 1920 年左右日本的社会思潮来看中国新文化運動」(百年回看五四運動――北京大学紀念五四運動 100 周年人文論壇、2019 年）は、この時期の日本の思想潮流が中国の新文化運動に与えた影響を具体的な事例を挙げて明らかにした。

森川裕貫「五四運動期中国における大同思想の興起とその意義」(『関西学院史学』第 46 号、2019 年）は、新文化運動の全面西洋化論が注目されがちなこの時期に、中国の多くの知識人が、国際連盟の組織を中国の伝統的な「大同」の概念で捉えていたこと、それが 1920 年代の連省自治運動につながっていくという思想的な流れを明らかにした。

以上のように、「研究の方法」で掲げた計画を着実に実施することで、「研究の目的」に掲げた中国近代史像の見なおしという学術的な目標を一定程度まで達成し、その成果を世に問うことができたと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計20件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小野寺史郎	４．巻 985
２．論文標題 戦後日本の中国近現代史研究におけるナショナリズム論	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 36-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野寺史郎	４．巻 73-11
２．論文標題 清末民初のミリタリズム	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国研究月報	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小野寺史郎	４．巻 なし
２．論文標題 中華人民共和国成立初期の「記念節日資料」中の毛沢東略伝について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター	６．最初と最後の頁 157-181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉澤誠一郎	４．巻 なし
２．論文標題 近代日本的中国城市指南及其印象：以北京、天津為例	５．発行年 2019年
３．雑誌名 巫仁恕主編『城市指南与近代中国城市研究』開源書局	６．最初と最後の頁 319-353
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森川裕貫	4．巻 78-3
2．論文標題 蒋介石『中国之命運』の国際的反響	5．発行年 2019年
3．雑誌名 東洋史研究	6．最初と最後の頁 124-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森川裕貫	4．巻 なし
2．論文標題 毛沢東と胡適	5．発行年 2020年
3．雑誌名 石川禎浩編『毛沢東に関する人文学的研究』京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター	6．最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺史郎	4．巻 なし
2．論文標題 デモクラシーとミリタリズム――民国知識人の軍事・社会観	5．発行年 2018年
3．雑誌名 中村元哉編『憲政から見た現代中国』東京大学出版会	6．最初と最後の頁 53-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺史郎	4．巻 なし
2．論文標題 徳謨克拉西与軍国民主義――一戦後中国的軍事教育与兵制方案	5．発行年 2018年
3．雑誌名 李在全主編『中華民国史青年論壇』第一輯、北京：社会科学文献出版社	6．最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺史郎	4．巻 14
2．論文標題 第一次世界大戦期の中国知識人と「愛国」の群衆心理――陳独秀を中心に	5．発行年 2018年
3．雑誌名 メトロポリタン史学	6．最初と最後の頁 27-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野寺史郎	4．巻 なし
2．論文標題 戦後日本の中国史研究における「近代」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山室信一、岡田暁生、小関隆、藤原辰史編『われわれはどんな「世界」を生きているのか――来るべき人文学のために』ナカニシヤ出版	6．最初と最後の頁 223-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 森川裕貫	4．巻 46
2．論文標題 五四時期中国における大同思想の興起とその意義	5．発行年 2019年
3．雑誌名 関西学院史学	6．最初と最後の頁 63-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉澤誠一郎	4．巻 なし
2．論文標題 近代世界のなかの日本と清朝	5．発行年 2018年
3．雑誌名 波多野澄雄・中村元哉編『日中戦争はなぜ起きたのか―近代化をめぐる共鳴と衝突』中央公論新社	6．最初と最後の頁 46-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉澤誠一郎	４．巻 なし
２．論文標題 危機のなかの清朝	５．発行年 2018年
３．雑誌名 小松久男編『歴史の転換期[9]　1861年　改革と試練の時代』山川出版社	６．最初と最後の頁 26-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉澤誠一郎	４．巻 978
２．論文標題 20世紀中国における人口論の展開	５．発行年 2018年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉澤誠一郎	４．巻 891
２．論文標題 五四運動とその残影	５．発行年 2019年
３．雑誌名 歴史地理教育	６．最初と最後の頁 10-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森川裕貫	４．巻 なし
２．論文標題 「五五憲草」解釈から見る五権憲法――雷震と薩孟武の所論をめぐって	５．発行年 2017年
３．雑誌名 日本孫文研究会編『孫文とアジア太平洋――ネイションを越えて』汲古書院	６．最初と最後の頁 101-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉澤誠一郎	4．巻 なし
2．論文標題 白鳥庫吉の東洋史学――史学史的考察として	5．発行年 2017年
3．雑誌名 渡邉義浩編『中国史学の方法論』汲古書院	6．最初と最後の頁 85-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉澤誠一郎	4．巻 76-1
2．論文標題 中華民国初期における大総統就任式典	5．発行年 2017年
3．雑誌名 東洋史研究	6．最初と最後の頁 79-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉澤誠一郎	4．巻 なし
2．論文標題 義和団をめぐる記憶と中国ナショナリズムの位相	5．発行年 2017年
3．雑誌名 川田順造編『ナショナル・アイデンティティを問い直す』山川出版社	6．最初と最後の頁 184-204
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉澤誠一郎	4．巻 なし
2．論文標題 民国初年の対日ボイコットにおける東南アジア華僑と孫文	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本孫文研究会編『孫文とアジア太平洋――ネイションを越えて』汲古書院	6．最初と最後の頁 235-252
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 吉澤誠一郎
2．発表標題 旅大回収運動(1923年)再考
3．学会等名 史学会第117回大会東洋史部会
4．発表年 2019年

1．発表者名 竹元規人
2．発表標題 従1920年左右日本的社会思潮来看中国新文化運動
3．学会等名 百年回看五四運動――北京大学紀念五四運動100周年人文論壇（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 竹元規人
2．発表標題 「新文化運動」と「文化主義」――日中間の思想の同時代性と差異
3．学会等名 五四運動百年記念シンポジウム
4．発表年 2019年

1．発表者名 森川裕貫
2．発表標題 「五四新文化運動」再考
3．学会等名 五四運動百年記念シンポジウム
4．発表年 2019年

１．発表者名 森川裕貫
２．発表標題 第1次世界大戦後の中国における国際協調論とその射程
３．学会等名 日本現代中国学会全国学術大会企画分科会（政治思想）
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉澤誠一郎
２．発表標題 辛亥革命にみる軍人の忠誠と反逆
３．学会等名 第67回日本西洋史学会小シンポジウム「忠誠のゆくえ――近代移行期における軍事的エトスの比較史」
４．発表年 2017年

１．発表者名 吉澤誠一郎
２．発表標題 「文人」瞿秋白の革命ロシア体験
３．学会等名 史学会第115回大会シンポジウム「ロシア革命と20世紀」
４．発表年 2017年

１．発表者名 竹元規人
２．発表標題 『陳独秀文集』の編訳に携わって
３．学会等名 「民国史の中の陳独秀」シンポジウム
４．発表年 2017年

１．発表者名 小野寺史郎
２．発表標題 2016年日本歴史学界：回顧与展望（中国・近代）
３．学会等名 第8回日韓中国近現代史研究者交流会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計4件

１．著者名 小野寺史郎著、金河林訳	４．発行年 2020年
２．出版社 サンジニ	５．総ページ数 312
３．書名 中国ナショナリズム――民族と愛国の近現代史【韓国語】	

１．著者名 佐川英治、杉山清彦	４．発行年 2020年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 297
３．書名 中国と東部ユーラシアの歴史	

１．著者名 京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター編、村上衛・森川裕貫・石川禎浩著	４．発行年 2019年
２．出版社 研文出版	５．総ページ数 147
３．書名 中国近代の巨人とその著作――曾国藩、蒋介石、毛沢東	

１．著者名 小野寺史郎	４．発行年 2017年
２．出版社 中央公論新社	５．総ページ数 262
３．書名 中国ナショナリズム――民族と愛国の近現代史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	吉澤　誠一郎 (YOSHIZAWA Seiichiro) (80272615)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	竹元　規人 (TAKEMOTO Norihito) (80452704)	福岡教育大学・教育学部・准教授 (17101)	
研究分担者	森川　裕貫 (MORIKAWA Hiroki) (50727120)	関西学院大学・文学部・准教授 (34504)	